令和６年度防衛大学校卒業式

中谷 防衛大臣訓示

卒業生の諸君、卒業おめでとうございます。

４年前の入校式では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、ソーシャルディスタンスで、御家族の方の参加が叶わず、諸君は本校での学生生活をスタートさせました。しかし、諸君らは、我慢強く、忍耐強く、ここにいる同期の存在は心強く、より絆を強くして、４年間の修業を終え、それぞれ立派に卒業に至ったと思います。

本日は、ホームカミングデーで、諸君の卒業を祝うため、私の同期の２４期卒業生約１４０名がこの卒業式に参列しております。ここ小原台で過ごした日々が、昨日のことのように思い出されます。

小原台の４年間は、喜び、楽しみ、感動し、かつ、時に涙した人生の中で最も貴重であり、そして、生活そのものに労することのない特権とも言える宝石のような日々でありました。

ここで皆さんは、
１．人としての修練を積み重ね
２．幹部自衛官として必要な知識、技能、体力を身につけ
３．指揮統率の基礎を身につけました。
このことは、既に自由と規律の調和を理解し、立派な士官候補生として、社会の中ではエリートとしての高みに位置付けられる存在となっています。

しかし、片時も忘れてはならないこと、それはノーブレスオブリージュの精神です。財力、権力、社会的地位の保持には責任が伴うことをさすものであり、身分の高い者はそれに応じて果たさなければならない社会的責任と義務があるという、欧米社会に浸透する基本的な道徳観です。

法的義務や責任ではありませんが、自己の利益を優先することのないような行動を促し、社会の心理的規範となっています。すなわち、高い地位には義務が伴うこと、終生にわたりこのことを胸に刻み、最後まで有用な国家の

一員、教養高き社会の一員であり続けることを切に祈ります。

同時に、学生舎生活を通じ、組織としての集団行動を実践したことは、いずれの社会にも通用する組織管理論を実践したことになります。情勢は刻一刻変化し、価値観も変化し、あらゆるものはとどまることなく変化し、そのスピードは早くなってきています。

いずれの国にも消長があり、栄枯盛衰は歴史の示すところです。しかし、その興(おこ)るや必ずそこに理由があり、また衰(おとろ)うるやその原因が必ずあります。

ダーウィンの言葉にあるように、強いものが生き残るのではなく、変化に適応したもののみが生き残るという言葉も忘れてはなりません。

論語に、「任重くして道遠し」という言葉がありますが、任務は重く道は遠いかもしれないが、これからも日々些事(さじ)を疎(おろ)かにせず、修養に勤め続けて欲しいということです。

卒業生の皆さんに求めることは、国民の信頼に背(そむ)かない道に洋の東西はないということです。ここ小原台の経験、小原台での友情を礎として、日本やそれぞれの故国において国民の期待に応える存在となってくれることを卒業生の一人としても切に願ってやみません。

全学生の未来に栄光あれ

昨年１１月、開校記念祭を視察しました。棒倒しの決勝戦、名勝負。国会での委員会での強行採決での１シーンのようでしたが、あらゆる戦術、戦略を総動員し、総力戦で惜しくも敗れたある大隊の総長は、悔しさを抑えきれず涙を流しながら表彰式に臨んでいました。私が卒業してから４５年経ちますが、彼らの姿を見て、私が在籍していた頃と何一つ変わっていない、「勝って泣き、負けて泣く。」学生達の涙からは、情熱を持って勝利を目指し、全力を尽くし、競い合う学生の強い思いに深く感動し、古き良き母校の伝統は決して揺るぎないものがありました。

今年度より実施した女子学生による棒引きも、新たな伝統も加わっており、あらためて母校の学生主体の発想の素晴らしさと機動力を沸々と感じました。

「廉恥・真勇・礼節」、諸君はこの言葉を胸に、本校で人間力を学んできたかと思います。私は、今なお、この言葉の意味を大切にしております。「廉恥・恥をしれ。真勇・真の勇気を出せ。礼節・礼儀作法を重んじよ。」すべての言葉が、自衛隊の幹部になる人にとって、大切な意味があります。

自衛隊の幹部は、過酷な任務・ストレスのかかる仕事であり、諸君らは常に部下たちから見られており、隙を見せてはいけません。諸君らが部隊の団結の核となります。だからこそ、リーダーシップ、何より人間力を日々妥協せず磨き続け、任官後の部隊勤務等において、職務に邁進することを期待しています。

今回、様々な理由で任官されない学生もおりますが、本校の大切な卒業生であることに変わりはありません。この学校で、同期と共に得た知識や経験を活かし、社会のため、ひいては我が国のために貢献していただきたいと思います。

また、留学生の皆さん。母国を離れ、本校での留学の経験は、これからの人生の糧(かて)となり、日本語も上達され、自分自身が大きく成長する機会であったと思います。本当に日本での就学、ご苦労さまでした。２国間での絆は、ここにいる卒業生と同じく、我が国にとっても大きな宝となるものです。

私は、先月、フィリピンのワレス空軍基地を訪問しました。その際、私の通訳をされていたのが、まさに防衛大学校を卒業した諸君の先輩方でした。「自分は防衛大学校の卒業生です」と私に挨拶してくれた諸君の先輩方が、母国で活躍している姿を間近に拝見し、非常に感動しました。私の後輩である留学生諸君が、防衛大学校の卒業生であることを誇りに思い、今後、それぞれ活躍されることを心から願っています。そして、いつの日か再会できることを楽しみにしています。

研究科を卒業する諸君。我が国を取り巻く安全保障環境は、戦後最もきびしく複雑なものとなっています。中でも技術は日進月歩であり、早期にこれに対応していかなければなりません。諸君は、研究科で学んだ高度な研究を通じて、専門性を十分に高められたかと思います。今後、それぞれの活躍の場において、教育の成果を如何なく発揮し、更に飛躍されることを期待しています。

卒業生の皆さんに贈る言葉として、私が防衛大学校で、春日佑芳（かすがゆうほう）先生から教わった、「道元の思想」の中にある「ません」という言葉を贈ります。

「ま」は「磨く」、「塼（せん）」は「瓦」のこと。「ひたすら瓦を磨くこと」これは禅の言葉です。その昔、「座禅をしている」弟子のところに来た老師が、「お前は近頃、何をやっているのか。」と尋ねたところ、弟子は「ひたすら坐禅をしています。」と答えました。老師は重ねて「何のために坐禅をしているのか」と問うと、弟子は「仏になろうとしているのです。」と答えました。すると老師は「瓦」を磨き始め、弟子に対し、磨けば必ず鏡になる。ません、つまりひたすら瓦を磨く行いそのものが仏となっていることであり、「仏になるために坐禅するのは、鏡にするために瓦を磨いているようなものだ」と諭しました。私は、瓦をいくら磨いても鏡にはならないが、自己の道にひたすら打ち込む姿勢の先に大切な心の鏡を見つけることができる。そうすることで、きっと皆さんの探していた道が見えてくると考えています。「我が身で悟ったものこそ真理なり」これは防大ラグビー部の渡辺義治先生の言葉で「物事をとことん考えよ」「真理、真実を探求せよ」ということです。「念ずれば通じる。」人は、ある日突然悟ります。それは思わぬ時と場所での、過去の先人からの教示です。

皆さんは、明日の自衛隊、そして明日の日本を引っ張るリーダーであり、日本国の宝です。強い自衛隊を作り、何でもできる部隊を錬成しなければなりません。皆さんの相手は、世界であり、その役割と期待はますます大きくなっています。「至誠にももとるなかりしか」「言行に恥ずるなかりしか」「努力に恨みなかりしか」「無精にわたるなかりしか」

みなさんも、ぜひ、ここ防大を卒業してからも日頃から自分自身の心の鏡を磨いて、修練を続けて、心の鏡を磨いてください。

最後になりますが、御家族の皆様。こうして立派に成長した大切な御子息・御息女の輝かしい姿を見て、安堵を感じてらっしゃることと思います。ほんとうによく頑張りました。心よりお祝いを申し上げたいと思います。先ほど、石破総理が訓示で述べられたとおり、今、政府を挙げて自衛官の処遇・勤務環境改善に取り組んでいます。自衛官であることが誇りである、御家族に自衛官がいて良かった、と思って頂けるよう政府を挙げて、自衛官の処遇・勤

務環境改善に全力を尽くしてまいります。

日頃から防衛省・自衛隊、防衛大学校に多大なる御理解と御支援を賜っております来賓の皆様に篤く御礼を申し上げますとともに、卒業生諸君の指導に誠心誠意あたられ、愛情を以て送り出していただきました久保学校長をはじめとする教職員各位に多大な敬意と感謝を表し、私の訓示といたします。

あらためて、卒業おめでとうございました。

令和７年３月２２日

防衛大臣　中谷　元